
空色のリセリア

嘉月 幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色のリセリア

【Zコード】

Z0272BA

【作者名】

嘉月 幸

【あらすじ】

『鳥籠の地』と呼ばれる、外界と隔絶されたレー・レヘイト大陸。その地で帝国軍の操縦士を務める『空帝』ことヒューイは、嵐の日、リセリアと名乗る身元不明の少女を助ける。その少女を一時的に保護・監視することになったが、まるで浮世離れしたような雰囲気をおいては、彼女に不審なところは見られない。

しかしある日、ヒューイの目の前に現れた敵国操縦士アルクスが『リセリアを渡せ』という要求を突きつける。リセリアは一体何者なのか？

小さな籠の中、空を求めるだけ飛行機乗りたちの物語。

序章 暴風

空を愛し、空に愛されし者よ
空色の呼び声に応えし時

蒼穹の頂きにて相見え

追風に舞う強き翼を以て

鳥籠は開かれん

その言葉は、いつの頃からか空を翔ける者たちの間で語り継がれてきた。

閉ざされた海、閉ざされた空。

閉鎖されたこの大陸の飛行機乗りたちは、その言葉を胸に果て無き空を目指し、小さき空を飛び続ける。

この大陸に飛行技術が誕生してから、数百年。

未だ『鳥籠の地』この大陸を飛び出した鳥は、一人としていない。

* * *

酷い嵐だった。

セレスト・ブル

十数分前まで頭上一面に至高の空色が広がり、今日の空は澄んでいるな、などと考える暇すらあつたというのに、今となつてはそんな余裕は欠片もなかつた。

空には真つ黒な積乱雲が覆いかぶさり、周囲は真昼だというのに夜中のように暗い。その上、ゴーグルに容赦なく叩きつける巨大な雨粒が視界を遮る。

まるで子供が、突然大泣きし始めたような そんな嵐の中を、

ヒューリイは単機飛び続けていた。

『トライ4！ 応答しろ！ ……ヒュー！』

「……聞こえてる」

縦横無尽に吹き荒れる風に機体を奪われてしまいそうになりながらも、左耳につけたヘッドセットから聞こえる部隊長の怒鳴り声に小さく咳き返す。

『聞こえていいなら隊列に戻れ！ 勝手に部隊を離れるとは何事だ！ 現状が分かっているのか！』

部隊長の半ばやけくそ気味の言葉が、どこか遠くに聞こえる。分かっている、とヒューリイは胸中で咳き返す。

国境線となる山脈付近で、常駐部隊とは異なる敵国の戦闘機部隊を発見したとの報告を軍本部が受けたのが、およそ一時間前。ヒューリイの属する空戦部隊には即刻出撃命令が下され、一部隊は報告のあつた地域を目指して飛び立つ。

そして現在飛んでいるのが、その問題の戦争最前線空域。まだこの周辺には敵機が潜んでいる可能性が高い。いつ戦闘状態に突入してもおかしくない状況だった。

今すぐ隊列に戻り、任務を続行しなくてはいけない。そう頭では理解していても、ヒューリイは独り飛ぶことを止められないでいた。

「悪い……ちょっと戻れない」

ポツリと零すヒューリイの眼前には、天を突くような山が聳え立つていた。国境線となるツスタンド山脈。その山並の中でも最も標高の高い、天空へ続くともいわれている箇所だ。

「呼んでる……声が。呼び声が聞こえるんだ」

『はあっ！？ 訳分からんこと言つてないでとつ……と戻れ！』

後半、部隊長の声に僅かな雑音が混じる。さすがの豪雨に電波が影響を受けているのか それとも、自分が部隊から離れすぎているのか。そんな考えが脳裏をよぎった直後、

『ヒューリイ！ ヒュ…………』

ザ、ザザツという強い雑音を最後に交信が途絶えた。それ以降は雑音しか聞こえず、ヒューリイは乱雑な動作で無線機のスイッチをオフにした。

風に逆らわず、大気の流れに翼を乗せてゆるりと右に旋回する。

天候は悪化の一途を辿っていた。いつの間にか強い雨風に加えて、獸が唸るような低い雷鳴まで聞こえている。何度か暗雲が光を発し、とうとう稲光が空に走った、その一瞬。

雷光に照らされて山肌に何か白い、小さな物体が浮かび上がった。視界にその白い影が入ったのは、空が一際強く光ったコンマ数秒。しかし、ヒューリイはそれを見逃さなかつた。

とつさに機体を傾け、暗闇の中地上に視線を凝らす。

シリエットは非常に小さい。ヒューリイの飛行高度から距離はざつと見積もつて百数十メートルしかないというのに、米粒のようブラックティ・レッド小さく見える。大きさと先ほど見た色からして、少なくとも血の赤色の敵国軍機ではないことは明らかだつた。

スツと機体の推進力を落として、徐々に高度を落として接近していく。

そして、ようやく何があるのかと確認できるまで近づき 田を見張つた。

「なつ……」

シリエットが小さくて当たり前だつた。眼下に見える荒れた山肌の斜面。最悪な視界に移つたのは、力なく倒れる一人の人間の姿だつた。

なんでこんな所に人が。そんな疑問が当然のように湧いてきた。

この地域は国境線 つまりは、戦闘の最前防衛線にあたる。それ以前にここは山の中腹にも達していないとはい、ゆうに標高一千メートルを超えている。更に、この山は降りても最寄りの街までは相当の距離がある。そう易々と足を踏み入れられる場所ではない。ぐるぐると脳内を回り始めた思考を、頭を振つて振り払う。

ここがどこであろうと、倒れている人間を放置しておくわけにはいかなかつた。

周囲を見渡し、比較的平坦な場所に機体を無理矢理止め、エンジンは切らずに低出力を維持して車輪ブレーキをかけておく。いつでも離陸可能な状態にして、ヒューリイは操縦席を飛び出した。

山肌にはあちらこちらに大小様々な岩が転がっていた。足場の悪さと時折吹き付ける突風に足を掬われそうになりながら、全速力で駆ける。そうしてようやく、人影がはっきりと見え、

「おい、大丈……！」

そう言い掛けて、思わず息を呑んだ。

少女、だった。

まだ若い。十代半ばと思われる少女が身に着けているものは、純白の薄手のワンピース一枚だけだった。そのスカートの裾から覗く靴すらも履いていない素足も、地面に投げ出された両腕も日の光を浴びていないように白く、細い。

目を引いたのはそれだけではなかつた。

濡れた地面に広がるのは、腰までありそうなほどに長い、淡いブロンドヘア。この大陸には存在しない髪の色だった。大陸の外界にはそういう容姿をもつた人間が存在するといわれているが、ヒューリイ自身見るのは初めてだった。

この雨で全身が泥に汚れてしまつていて、その煌髪と白い肌は、暗雲の下であつてもなお光を放つていていた。

あまりにも細く、華奢で、触れれば手折つてしまいそうな、そんな嬌く清廉な少女の姿に、ヒューリイは呼吸すらも忘れてその場に立ち尽くしていた。だが、

「あ……」

降りしきる雨音に混じつて聞こえた少女の微かな呻き声に、はつと我に返る。

慌てて駆け寄り、少女を抱き起こす。その身体は、見た目から想像した以上に軽かった。

雨で張り付いた髪ごと力任せにゴーグルを額の上に押し上げ、少女の顔を覗き込む。顔にかかっていた少女の前髪を払うと、人形のように端正な顔立ちが顕わになる。

「大丈夫か、しっかりしろ！」

「助け……」

「大丈夫だ！俺が助ける。だからしつかり……！」

残る力を振り絞つて伸ばされた少女の手を掴み声を荒げるものの、返答はそれ以降ない。

よく見れば、身体に付着しているのは泥だけではなかつた。まるで崖から滑落したかのように、剥き出しの肌のいたるところに無数の擦過傷がある。傷の程度は深くないが、そこから流れ出た血が泥に混じつて白い肌を汚していた。

操縦用のグローブを外して、軽く頬を叩く。それでも返答はなく、触れた陶磁器のような肌は長い間雨に打たれていたのか、それこそ人形のように冷え切つていた。

雨に濡れてしまつてはいるがよりもマシ、ヒューライトジャケットを脱いで少女の肩にかけ、両腕にぐつと力を込める。ヒューリーはその華奢な身体を持ち上げると、一目散に機体へと走つた。

この子がどういう経緯でこのような状態に陥つているのは分からないが、ひとまず基地に連れ帰つて手当てしなくてはならない。このままの状態が長く続けば最悪、少女の命に関わることになるかもしけなかつた。

蒼穹色の機体まであと数歩となつた、その時。

「じつと風を切る音とレシプロ機特有のエンジン音を響かせて、頭上を一機の戦闘機が通過していった。反射的に見上げた機体の色は、暗闇に紛れるような暗色のレッド赤。

雨音で接近する音に気付かなかつたのか、少女のことこに気を取られすぎていたのか。内心自分を叱咤しつつ、少女を腕の中に硬く閉じ込めて、ヒューリーは岩陰に身を隠した。

悪天候が幸いしたのか、こちらの姿にも機体にも気付かなかつたようで、敵機はそのまま上空を通り過ぎていった。

少女を再び抱え上げ、操縦席に収まる。少女が小柄なおかげで、彼女を膝の上に乗せた状態でも何とか操縦できそうだつた。

敵機が戻つてこないうちに、この空域を離脱しなければいけない。そのための猶予は、あまりなかつた。

(嵐の終わり、か)

突発的に発生する積乱雲は、嵐をもたらすが大抵は短時間で収まる。

ふと南の空　　自国の拠点がある地域　　を見れば、積乱雲の切れ目は直ぐそこまで迫っていた。それにあわせて徐々に雨足は弱くなり、空には明るさが戻つてきている。

これなら本来一人用であるこの機体でも、それなりの安全性を持つて飛べるだろう。だが、同じく敵機の機動性も、こちらの捕捉されやすさも格段に上がる。おそらく、次は確実に見つかる。

先程の無理な着陸でエンジンに異常をきたしていないか確認しつつ、ヒューリーイは離陸のタイミングを図る。

離陸のことを考えずに着陸したせいで、機体の進行方向には離陸速度に達するために必要な滑走距離の半分もない。その先は　断崖絶壁といつても過言ではない急斜面になつていて。最善の離陸法は、崖から飛び出し、山肌を撫でるように吹き上げる風に乗る方法だろう。

無骨なゴーグルを、下ろす。額の上から、目元へ。

スロットルレバーを最大まで押し込もうとし　　視界の左端に、高速で接近する機影を捉えた。つい数分前に頭上を通り過ぎた敵機が、左後方からヒューリーイの乗る戦闘機に向かって一直線に飛来する。機体前頭部に取り付けられている機銃は、間違いなくピタリとこの機体に照準されているだろう。

背筋を這い上がる、悪寒。

ヒューリーイは全力でレバーを押し込んだ。エンジンが全開になるのと同時に、ブレーキを解除。

機体が滑るように動き出した直後、暴風のような弾丸の嵐が右主翼の後ろに降り注いだ。

「くつ……」

間一髪避け　　というわけにはいかなかつた。直撃は回避したものの、いくつかが補助翼とフラップを掠めていく。いずれも機体に

致命的なダメージを与えるものではない。だが、

「つうつ

右前頭から雨に混じつて垂れた真っ赤な液体を右腕で無造作に拭う。その右腕からも鋭い痛みが走った。

一発。避け切れなかつた弾の一発が頭を浅く、もう一発が右肩を抉るよう掠めていた。

敵機は速度を落とさずヒューリイの上空を通り過ぎる。恐らくは旋回して、今度はヒューリイの正面に回りこむつもりだ。

しかし、それよりもヒューリイが崖から飛び立つほつが早かつた。途端吹き上げてくる強い上昇気流が翼を持ち上げた。一気に敵機よりも上空へ舞い上がる。いうなれば、再度上を取らない限り敵機はそいつ手を出せない。

無論、ヒューリイがそれを許すはずがない。

敵機が機首を転換するよりも早く、速度を上げ、追い風に乗るようにして離脱進路をとる。気流を利用してしまえば、こちらの機体の方が軽い分速度が出る。油断しなければ、振り切れ。

「だ、れ……？」

離陸の際に意識を取り戻したのか、少女がうつすらと開いた瞳でヒューリイを見上げる。しかし、その消え入りそうな声に直ぐ応えることは出来なかつた。

頭部の傷が思つたよりも酷いのか、ゴーグルの隙間から流れ込んでくる血が右目の視界を赤く染めていた。操縦桿を握る右腕の付け根からは断続的に痛みが走り、力を込められない。後方から追つてくる敵機もあり、とても応えていられる状態ではなかつた。

だが、ヒューリイの口はまるで他者に操られているよう、元通り滑らかに動き出した。

「ヒューリイ

凛とした、張りのある声で。

「メテオール帝国軍第三遊撃隊所属、ヒューリイ・ノルグス」

その名乗りに応える声はない。再び意識を失つたのか、それを確

認する余裕すら今のヒューリにはなかつた。けれど

ヒューリ、と。腕の中で少女が呼んだような気がした。

第一章 籠の中の鳥

通り過ぎる雷雲の下にいるよつだつた。
響く音は大きくなつたり小さくなつたりと、どこか乱暴な音楽を奏でているかのようにも聞こえる。

確か、先日の飛行中に遭遇した嵐の雷鳴もこんな感じだったかなと。今この場所に呼び出されている原因を思い起こし、ふと目だけを動かして窓の外を見やる。

空は、鮮やかな青色だった。遠くには雲の波も見える。
嵐の気配など欠片もない、いい天気だつた。

（あー飛びてえ……）

強い風に乗つて飛ぶのも面白いのだが、やはり今日のよつな穏やかな空の下でのんびり、というのが一番いい。

なによりもう四日も飛行機に乗るどころか触れてもいない。空が恋しくて仕方なかつた。

真正面から飛んでくる部隊長の怒声はどこ吹く風。そんな様子のヒューリに気付いたのか、椅子に腰掛ける部隊長カルダ・ダグラス少佐の片眉がピクリと跳ね上がつた。

とうとう雷直撃か。そんな予想が一瞬よぎる、が。

「……そもそもお前には戦闘機乗り……いや軍人としての自覚が欠けてるんだ。もう少しさは」

彼の性分では今ここで能書きも建前も全て捨てて、ヒューリに掴み掛かりたいところなのだろうが、さすがはメテオール帝国軍最年少少佐昇進記録保持者。こらえた。

広々とした光沢のあるテスクの上に広げられている、ヒューリが過去提出した始末書の数々を捲り、カルダは言葉を続ける。だが、

「ふああ～あ」

「……ノルグス少尉。聞いているのか」

「聞いております。ダグラス少佐殿」

思わず欠伸の出でてしまった口を押さえながら返した、テンプレー
ト典型的な生返事に。

ブチイ、と。カルダの脳内で何かが断ち切られる音を聞いた気が
した。

腰掛けていた椅子を豪快に後ろに倒し、カルダは両手で力の限り
にデスクを叩く。

「どこが……聞いてるっていうんだ、この軍紀破り常習犯！ いつ
もいつも任務に出る度隊列崩して、戦況乱して お前が軍紀違反
するたびに上官の俺まで咎められるんだからな！」

（怒ってる原因、せつてーそれだろ）

思わず本音が零れてしまつたカルダに、内心突つ込みを入れてヒ
ューアイは睨み返す。

「あーうつさいなー。分かってるよ独断行動をしたのがいけないん
だろ。以後、十二分に気を付けます。はいこれでいいだろ！」

やけくそ氣味にそう言い放ち、ヒューアイは目の前の上官兼友人を
睨み付けた。

メテオール帝国軍カルダ・ダグラス少佐。ヒューアイの軍学校時代
からの友人で、つい先日、ヒューアイの一つ上 二十一歳で軍少佐
に昇格した飛行機乗りだ。現在彼は、ヒューアイの所属する遊撃隊の
隊長を務めている。

一応カルダは上官、態度には気を付けなければいけない。常々そ
う思つてはいるのだが、どうしても昔からの癖は抜けない。それは
カルダも同じのようだ、お互い、時に上官と部下という立場を忘れ
て言葉をぶつけてしまう。

なにより呼び出されてからかれこれ三十分近く、ヒューアイは直立
不動の体勢でカルダの話を聞かされているのだ。そろそろ我慢の限
界だった。

反省の色が見えないヒューアイに、カルダの黒曜石の瞳に灯つてい
た炎が苛烈さを増す。

「それが分かつてないっていうんだ！」

伸ばされたカルダの手が、迷わずヒューリイの軍服の襟元を掴む。まだ直りきつていらない右肩の傷が、鋭い痛みを発する。

「いつてえ！ 病み上がりなんだから加減しろよ！」

「嘘言え！ 病み上がりつていつたつてただの風邪で寝込んでただけだらうが！ 命令違反の報いだ報い！」

そうカルダが、ヒューリイをぐつと力任せに引き寄せる。ヒューリイも反射的にカルダの首に絞められたネクタイに手をかける。その時、「あんた達うるさい」

氷の刃のように鋭い一言が、二人の間に漂う空気を切り裂いた。ヒューリイは反射的にカルダの執務室の入口に目を向ける。そこには、木製の豪奢な扉に手をかけ、眼鏡の奥から冷めた視線を投げてくれる一人の女性の姿があった。

身を包む、タイトな軍服。ロングスカートの裾からは光沢のある黒のブーツが覗き、首元には同色のネクタイが締められている。結い上げられた髪と、細めの眼鏡が凜々しい印象を強めていた。

「カルダもヒューリイも、声、廊下まで聞こえてるわよ」

彼女 ルベリエ・クリソベルの呆れた声に、二人ははつとして手を離す。

そんなヒューリイとカルダを交互に見比べて、ルベリエは深々と溜息を吐いた。

「ほんとにもう……二人とも子供じゃないんだから」「すみません……』

異口同音に謝罪の言葉を唱え、視線を落とす。まるで母親に怒られている少年のような一人の姿に、ルベリエの視線の温度が一段階下がるのを感じた。

ルベリエは、今は別の部署に異動してしまったが、一年前、任務中の事故が起こるまでは同じ部隊で翼を並べていた仲間である。

軍内の階級ではカルダの方が上なのだが、多少の年齢差のせいもあるのか、どうしてもルベリエだけにはカルダも頭が上がらないのだ。

「そんな大声出しても、この子が怖がるでしょう」

そう言つてルベリエはすつと、身体を横に一步滑らせる。長身のルベリエの後ろ そこに、見覚えのある少女が佇んでいた。

室内でも日の光のように輝くブロンンドヘアと、白磁のような手足。純白の薄手のワンピースを纏う、線の細い身体。

忘れるはずがない。あの嵐の中で見た、記憶に強く焼きついて離れることのない少女がそこにいた。

「君は……」

呆然とヒューリイは呟く。しかし、それに続く言葉が何故だか出てこなかつた。

少女は何かを伺つようにルベリエを仰ぎ見る。それに対し、ルベリエは柔らかい笑みを投げかけると、少女は笑顔で小さく頷き返した。

まるで、野に咲くシロツメクサが花開くような笑みだつた。

少女は少し躊躇いがちに、けれど軽い足取りでヒューリイに歩み寄つてくる。ふわりふわりと腰まであるブロンンドが宙に舞い

「！？」

抱きつかれた。

眼前で止まるかと思ひきや、少女は最後の一歩を強く蹴つてヒューリイに飛びついた。

予想もしなかつた出来事に、ヒューリイは身体を硬直させた。何をされているのか一瞬理解できず、抱きつかれた勢いそのままにふらつぐが、危ういところで少女の身体をしつかりと抱きとめる。

それから腕の中の少女を見ると、彼女は幸せそうな笑みを浮かべてヒューリイの胸に顔を埋めていた。

再び硬直。意識が遠退きそうになる。自慢できる話ではないが、この年になるにも関わらず、ヒューリイにとつてその手の話は、別次元の存在と言つていいくほど縁遠いものなのだ。

「え、ええっと、ちょっと、君」

何故、女の子に突然抱きつかれているのか。何でこの子は俺の胸

に顔を埋めているのか。

自体が飲み込めず、両手を挙げ白旗を振るヒューリーイはとつたにルベリエとカルダを見た。

「お前、その子のこと氣にしてただろ。だからちよつとルベリエに頼んで、連れて来てもらつたんだ」

「助けてくれたあんたが怪我して寝込んでる、なんて言つたらすごい心配してたんだから」

身体に細い腕を回している少女は、よほどヒューリーイの事を氣にかけていたのか、腕の力を緩める氣配がなかつた。

そんな少女に、ルベリエは苦笑を漏らす。

「リセリア。ヒューリーイが困つてゐるから」

「あ、はい」

控えめな返事をし、リセリアと呼ばれた少女は名残惜しそうにヒューリーイから身を離す。

「ごめんなさい。本当に、会えて嬉しくて……」

少し照れたように頬を染めるリセリア。その小さな仕草さえも、目を奪う。あの嵐の中で、光を放つていて感じたが、その印象は田の下でも変わらなかつた。

背筋を伸ばし、リセリアは後ろで手を組みヒューリーイを見上げる。

「改めまして、リセリアです。助けてくれてありがとうございます」

嬉しそうに細められた瞳は、空のように澄んでいた。

* * *

整えられたカルダの執務室に、紅茶の香気が漂う。まだカルダとヒューリーイの間で仕事の話が残つてゐる、と知つたルベリエが淹れてくれた紅茶だつた。

「もう、カルダがさつと話を済ませないからよ。手早く終わらせよ」

「すみません、ごめんなさい」

淹ってくれたルベリエは、平謝りするカルダにぶつくさと文句を漏らしながら、リセリアと共にバルコニーへ出て行く。

当初の予定では、ヒューリイへの説教が終わる頃に一度リセリアを連れて来てもらうつもりでルベリエに時間を指定していたらしい。意気消沈のカルダはヒューリイの向かいのソファに腰を下ろし、深々と溜息を吐いた。そんな彼を見て、ヒューリイは「ざまあみろ」と心中で罵る。

バルコニーのガラス戸が完全に閉じられるのを確認し、ヒューリイは口を開いた。そう、ここからが、本題だつた。リセリアを部屋の外に出して話さなければいけない事。

「身元確認、取れなかつたか」

「ああ」

驚き一つ見せず状況の確認をするヒューリイに対し、カルダはカチヤリ、とカップの中の紅茶に口をつけながら平静に応じた。

ヒューリイが負傷しながらも、リセリアと共に基地まで帰還したのは、四日も前の事である。

ヒューリイの怪我は、そう酷いものではなかつた。しかし、あの雨の中での飛行でずぶ濡れになつたヒューリイはその後高熱を出し、三日間も寝込むという羽目にあつたのだ。体調が戻つたのは今朝方の事で、それまでは基地の一角にある自室に缶詰状態だつたのである。カルダもカルダでその時の報告や、ヒューリイが勝手に連れて來たリセリアの処遇の対応に追われていたらしく、二人揃つて落ち着いて話す機会が得られず今に至る。

「近隣の村はおろか、メテオールの戸籍データに照合しても該当しなかつたからな。それでお前に詳しいことを聞こうと思つたんだ」

通常、軍が何らかの事情で一般人を保護した場合は、一時的に軍でその身柄を預かるが身元の確認が取れ次第しかるべき処置を取る。メテオール帝国民であれば、その身元照合は一日一日程度で終わる。しかし、リセリアは三日経つた現在でも軍に身柄を保護されている。つまり、身元確認が取れなかつたということだ。

故に、カルダはこうしてヒューリイを呼び出したのだろう。

「今のところ、上にはあの子を拾った状況とか、簡単なことしか報告できていからな」

「……何？ 上が報告しろって言つてきてるわけ？」

一見すればただの少女にしか見えないリセリアに対し、『軍上層部が必要に情報を求めてくるのも不思議だつた。

「見つかった場所が場所だしな。それに、あの髪の色。貴重な『外の』人間じゃないのかつていうことだ」

「そつ……！ ……外つて、おい。前に見つかったのいつの話だよ」
突拍子もないその推測に、ヒューリイは思わず今まさに口に付けようとしていた紅茶を噴出しそうになる。しかしそうさま落ち着きを取り戻し、改めて紅茶を啜つた。ミルクも砂糖もないストレートティーの程よい渋みが舌の上に広がる。

このレーレヘイト大陸は、閉鎖された地だ。

大陸周囲の海は、岩礁輪と呼ばれる円環状の岩礁地帯にぐるりと囲まれており、いかなる船もその海域を通り抜けることは出来ない。随分と昔には岩礁輪を抜けての大陸脱出を試みた者もいたらしいが、過去に成功例はない。今でもその海域には、座礁した数々の船の残骸が散らばつている有様だ。

そこでこの大陸の人々は、空に大陸外への脱出手段がないものかと摸索し始めた。そうして航空機が生まれ、ようやく大陸の外を見ることが出来る。そう思われた。

だが無情にも、天は人々を見放した。

環気流　　強い上昇気流と下降気流が複雑入り乱れながら岩礁輪上空を取り囲む、不可思議な乱気流が存在していたのだ。それに阻まれ、今日までに大陸外への飛行を成功させたものは一人としていない。

近年、飛行技術の向上が著しく、飛行機が環気流を打ち破るのは時間の問題だともされている。それでも、それがいつになるのかは見当も付いていない。

陸海空路共に、大陸外へ出る手立てがないこの地を、人は『鳥籠の地』と呼んでいた。この大陸はまるで人を閉じ込める大きな鳥籠。飛行機乗り鳥は大陸外籠の外を目指し、今この時もあがき続けている。

しかし、閉鎖された地とはいっても、鳥籠の外からの交流がゼロなわけではない。岩礁輪より外の海で漂流し、この大陸に流れ着いた者が極稀にいる。

『外』との交流が断絶されているこの大陸では、『外』から来た人間は、大陸外の様子を知るための貴重な情報源だった。『鳥籠の地』を脱出する方法や、飛行技術の飛躍的向上を望めるものもあるかもしけないと、帝国は『外』の情報は喉から手が出るほどに欲しがっている。

「俺に聞いてくることは、もうリセリアからは色々聞いたんだろ?」

「聞いたっていえるほど、聞けたわけではないけどな」

ヒューリイは、カルダが上に報告したものと同様の報告書のページを捲る。そこにはあどけない顔を映したりセリアの写真と、彼女の簡易プロフィールが記されていた。だが出身地は書かれておらず、名前も『リセリア』とだけでファミリーネームも何もない。読み進めると、その他にも、いくつかの備考が報告されているが、その量は圧倒的に少ない。たった数枚の報告書はあつという間に読み終わった。

「これだけ?」

「これだけ。だから拾ってきた當人に、当時の状況を詳しく聞かせて欲しいんだよ」

「と、いっても……なあ……」

うーん、とヒューリイは唸り、手元の報告書をローテーブルの上に放り投げる。

リセリアについてヒューリイが報告できることは、ゼロに等しかった。何せリセリアとともに会話したのは先ほどのが初めてである

し、当時の状況について言えることは、既にカルダも全て知っているのだ。

前線での発見。負傷していたこと。敵機との遭遇。それらはリセリアとヒューリー機の状態を見れば、一目で分かることだ。

思索。だが、いくら当時の様子を思い返してみても、取り立てて何も出てこなかつた。

「もしかしたら、なんだが」

報告書を纏めて端に寄せ、ちらりと、カルダはバルコニーにいるリセリアを伺う。

「……ナディア皇国軍関係者って可能性はないのか？」

潜められた声に、ヒューリーは知らず意識を研ぎ澄ました。

おそらく、これがカルダ個人として最も聞いておきたかったことなのだろう。そのために、都合の悪くなつたりセリアを外に出した。レー・ヘイト大陸は、下弦の三日月のような形をしている。丁度、月の影となつている部分が大陸東部から中央にかけて侵食している内海に相当している。三日月型の陸の真ん中にはツスタンド山脈が聳え立ち、北と南に地域を分断している。その南側がヒューリー達の国・メテオール帝国、そして北側を支配するのがナディア皇国だ。

十八年前に開戦があつて以来、両国は敵対関係にあつた。十六年前には休戦協定が結ばれたものの、その協定も一年前に破られてゐる。

途中、戦争の起つていなかつた十四年間も含め、両国は互いの内情を探るために相手国に密偵や暗殺者を忍びこませていた。それは、現在でも変わっていない。帝国側も当たり前のようにやつてゐるし、逆に皇国の者に侵入されたことも多々ある。

リセリアがそういう手の者じゃないのか。そう言わんとしているカルダの意見に、ヒューリーはとつさに首を横に振つていた。

「まさか。スパイだつていうのに、あんな目立つ子送り込んでどうするんだよ。それに、そだだとしたらなんであんな危ない場所に放つておくんだよ。たまたま俺が通りかかつたから彼女はこつ

ちの国に來てるけど、あんな場所だつたらメテオール軍に見つかる可能性極低だぞ？」

「逆に言えば、スパイはありえないだろ、と思い込ませるのを奴らが狙つてるつて事も考えられるけどな」

鋭い切り返しに、ヒューリイは渋面になる。

慎重に物事を考えるのは良いことであるし、分からぬ話でもない。リセリアが何者か分からぬ今、カルダも不安要素はなるべく取り除いておきたいのだろうが、少々カルダの考えすぎじゃないか、と思う節もあつた。

「俺的には、全然そんな感じしないんだけどな」

「俺も同意見」

至極当然に頷くカルダに、ヒューリイは眉根を寄せた。

「自分であれこれ言つておいて、それ？」

「あれは客観的に見た意見。まあなんだ……見てりや分かる」

疲れたように空笑いを漏らすカルダに、ヒューリイはますます首を傾げる。

そんなヒューリイを無視して、カルダは立ち上がつた。仕事の話はこれにて終了。退室してもらつていたルベリエ達を呼びに行くのだろう。ヒューリイもカルダに続いて立ち上がる。

「とりあえず上への報告は後にしておくとして。ま、ひとまずはしばらく監視を続けるか」

「ん？ 監視？」

「当たり前だろ。一応、敵か味方が分からぬんだから。今のところ、ルベリエがリセリアの傍に付いているだろ？」

だからルベリエがリセリアを連れてきたのか、と一人納得して、ヒューリイも席を立つ。

ふとバルコニーを見れば、その向こうで訓練用の戦闘機が離陸している様子が見えた。戦闘機、というより飛行機が珍しいのか、リセリアは手摺りにぐつと身を寄せて、飛び立つ機械の鳥を食い入るように見ている。かと思ひきや、隣のルベリエに向けて満面の笑み

を浮かべる。その笑顔を見ているだけで、楽しそうな笑い声が聞こえてきそうだった。

しかし、カルダの足はそんな彼女たちの元に向かつてはいなかつた。何故かカルダは、自分の執務机へ。その一番上の引き出しを開けている。

「あーそうそう、ヒューリ。お前に新しい命令があつたんだつけ」顔を伏せているため、彼の表情を伺う事は出来ない。だが、その切り出し方と口調からして、カルダが絶対に笑みをこらえていることが分かつた。長年の付き合いさまさま。

嫌な汗が背筋を伝う。

引き出しから取り出した、一枚の薄い紙。それをヒューリに差し出し、カルダは軍人らしい引き締められた声で言った。

「メテオール帝国軍カルダ・ダグラス少佐の名において、ヒューリ・ノルグス少尉を、少女リセリアの監視役兼世話係りに任命する」

「はいはい監視役……」

なんだ、女の子一人監視するなんて、どうしてことな くない。監視役兼、なんて言った？

「世話係」

心の声をつい声に出してしまつっていたのか、カルダがずいと薄っぺらな紙 指令書を突きつけてくる。

「監視役だけならまだしも、なんで世話係も入るんだ！」

思わず声を荒げたヒューリに、カルダはあくまでも淡々としていた。

「しばらくは基地の中で様子を見るが、あの子が基地の生活設備を勝手に使えるわけないだろ？」

「いや、それは……」

分かるが、男の自分に年頃の女の子の面倒が見れるわけないだろ、ヒューリは頭を抑える。

「第一監視役なら今ルベリエが任に付いてるんだろ？」

「ルベリエがリセリアに付いているのは、基地の女手が足りないか

らであつて、彼女だつて通信士としての通常業務がある

「それは俺も同じだ」

遊撃隊は、いつ出撃が下されるか分からぬ。飛行訓練や機体のチェックを行つた上で、いつでも出て行ける態勢でいなければいけないので。

きつい視線で見据えてくるヒューリーに、カルダは難しい顔になる。

「しばらくは、第三遊撃隊に出撃命令は下りない」

その確信を持った言い方に、ヒューリーは怪訝にカルダを見た。

「ナディア軍が、中央から西にかけての前線戦力を撤退させているらしい」

「撤退？」

「完全撤退というわけではないらしいが、ナディアの王都に戦力を集中させているらしい。何故そんな行動に出ているかは探り中。けど、今のところ仕掛けてくる気配はない」

前線の中央から西というのは、おおよそツスタンド山脈が国境線となつてゐる地域。ヒューリーたちが前線に駆り出される地域だ。そこで戦闘が起らなければ、確かに余裕は出てくるかもしない。

だがしかし、リセリアに四六時中付いていなければいけないというのも、さすがに困る。

未だ納得できない様子のヒューリーの心情を見破つて、カルダは軽く笑む。

「安心しろよ。ルベリエにも監視役は続けてもらつ。日中はヒューリーが担当、夜はルベリエつてことで交代制にする」

「あ、ああ。よ、よかつた……」

「監視つていつてもお前はリセリアを連れていつも通りにしてればいい。通信官のルベリエと違つて一緒にいても機密情報が漏れる事はないだろうからな」

「そうだな。そうしてくれるとありがたい。それなら俺も飛行訓練に出れるし

訓練の時は、リセリアを近くの誰かにでも預けておけば問題ないだろう。

胸をなでおろすヒューリイに、ホント飛ぶことしか頭にないんだな、と苦笑混じりに呆れて、今度こそカルダはバルコニーに向かつた。

「ま、大変だとは思うが、独断行動の報いだと思って、頑張れ」

「……何が？」

力のこめられた「頑張れ」の一言に、ヒューリイは眉根を寄せて背を向けたカルダを見た。

違和感と同時に覚える、嫌な予感。

「仮にリセリアがあつちの人間だったとして」

そう呟くカルダ。しかし、その後に続く言葉はなかなか出てこなかつた。ヒューリイが続きを待っている内に、バルコニーから不満顔のルベリエときょとんとしているリセリアが戻つてくる。

そんなりセリアにも聞こえるように、カルダは一言。

「『空帝』ほど目立つ存在はいないだろ？」

せいぜい目立つて囮役になつてくれ。振り向いたカルダの爽やかな笑みがそう告げているような気がした。

……この野郎。端から人を利用する気かよ。

* * *

通信室や会議室など、基地の中核機能が集まる中央棟。その一角の廊下では、軍事基地では珍しいかわいらしい声が響いていた。

「本当？　じゃあこれからはヒューリイが一緒にいてくれるの？」

リセリアの鈴を転がしたような声が、前を歩くヒューリイの背に投げかけられる。しかし、ヒューリイが応えるよりも早く、リセリアの隣に並んで歩くルベリエが「そうよ」と短く応えて、しつとりと微笑む。それを聞いたリセリアの顔に、笑顔の花が綻んだ。

リセリアとルベリエを連れてカルダの執務室を後にしたヒューリイは、ひとまずリセリアに、これからは自分が行動を共にするという

ことを伝えた。今はルベリエも一緒にいるが、もうじばらくしたら通常業務に戻らないといけないためだ。

「俺は昼間だけ。夜は今まで通りルベリエと一緒にいてもううつてよ」「夜はさすがに一緒にいさせられないからねー」

と、ルベリエが背後から釘を刺していく。背中に感じる視線が、まさしく釘が打ち込まれているように感じる。

「私が一緒にやなくても大丈夫?」

「うん、平気」

そう優しく問い合わせるルベリエとリセリアは、仲の良い親子か姉妹に見えた。二人とも瞳の色系統が同じ事と、ルベリエの髪がこの大陸の者にしては色素が薄く光加減によつて淡い黄金色に見えるせいもあるだろう。

「それと俺、いつも通り仕事場回つたりするけど、リセリアは気にしない?」

「仕事場?」

首を傾げるリセリアの肩から、さらり、と金糸の髪が流れる。

カルダには業務は通常通り行つて良いといわれているが、これだけはリセリア本人にちゃんと聞いておかねばならない。監視対象とはいえ、リセリアは年頃の女の子だ。むやみやたらに油臭い機体整備工場や騒音の発生する飛行場に連れて行つて、不快な思いをさせるわけにはいかないだろう。

しかしヒューリイの予想とは裏腹に、それを伝えたりセリアは柔らかな笑顔を返してきた。

「大丈夫、ヒューリイ。ヒューリイと一緒にいれるだけで嬉しい」

リセリアは少し照れたように口元に合わせた手を当てて、ヒューリイを見上げてくる。その仕草は可憐だったが、どこか幼く見える。

ふと、先程の報告書に書かれていたリセリアの年齢を思い出し、ルベリエを手招き。耳打ちする。

「……リセリアって本当に十六歳?」

「つて、私は本人から聞いたわよ。てか、あんたあの子にいつたい

何したのよ。なんで会つたばかりのあなたにあんなに懐いてるのよ
「な、何もしてないっての！」

半眼で顔を近づけながら追及してくるルベリエに、思わず声が大きくなる。

確かに、この四日間一緒にいるルベリエと違い、ヒューリイはまだリセリアと数えるほどしか言葉を交わしていない。執務室で顔を合わせた時も違和感を覚えたが、いくらヒューリイが助けたとはいえ、見ず知らずの男に対する態度としてはいささか親密過ぎる気がする。慌てて後ろを振り向くと、二人の会話は聞こえてなかつたのか、リセリアはきょとんとし、それからまた一二一二二としてヒューリイを見る。

カルダの言つていた、「見てりや分かる」の言葉を理解。こんな無垢な笑顔を見せられて、誰がリセリアは敵だと考えられるだろうか。それだけではない。軍人云々という以前に、リセリアの一挙一動はあまりにも幼く、拙いのだ。

油断しないに越したことはないが、リセリアを見ていると、彼女は一体なんだと考えるのが馬鹿らしくなりそうだった。

やがて中央棟の正面出口に辿り着く。表はやはり人が多く、リセリアに好奇の視線が浴びせられる。本人は気付いてないのか、軽い足取りでヒューリイの後を付いて来る。

中央棟を出てしばらく歩くと、基地の端に黒く錆びた倉庫が幾つも立ち並んでいるのが見える。戦闘機の整備工場と格納庫だ。リセリアを助けた時に少し被弾していたため、機体の様子が気になつて仕方がなかつた。

歩調の早まるヒューリイの足。その後ろで、ルベリエが足を止める。

「それじゃ、私はここまでで。仕事に戻るわね」

「つと、そろそろ時間か。たまには格納庫に寄つてけば？」

「……遠慮しとく。気分じやないから」

顔に影を落としたルベリエを見て、ヒューリイは小さく「そつか」とだけ応えた。

ルベリエは身を翻すと、颯爽と中央棟に戻つていぐ。

「リセリアのこと、頼んだわよー。夕飯終わったらその子の部屋に連れて行つてねー」

振り返ることなく、ひらひらと手を振つてくるルベリエに了解と言ひ、ヒューリーは扉が開け放しになつてゐる格納庫に入った。途端鼻を突く、機械油独特の臭い。

気になつてリセリアを見ると、彼女は嫌な顔一つしていなかつた。それどころか、こういつた場所が初めてなのか、忙しく辺りを見回している。

「フェリオット、いるかー？」

何かと懇意にしている整備士を呼ぶ。声はさほど大きくなかったのだが、倉庫内に反響してやけに大きく聞こえた。しかし、いつもここにいるはずの彼からは返事がない。

「リセリア、こっち」

仕方なく、ヒューリーは愛機を探す。リセリアは、親を追う小動物のようにヒューリーの後を付いて來た。

愛機は直ぐに見つかった。同じくして、首を回した方向にフェリオットの姿を見つける。黒く煤汚れたつなぎに、ぼろぼろの軍手。細身だが、たくましさを感じさせる後ろ姿だった。

機体情報が書かれている紙面をにらめっこしては、その周りの二、三人のパイロットとなにやら話し合ひをしているようだつた。どうやら先客らしい。

しばらく待つしかないか、と小さく嘆息する。この機体はヒューリ用になつてゐるため、フェリオットに専門で整備を頼んでいるのだ。

と、機体を見ていたリセリアがヒューリーを向く。

「これがヒューリーの飛行機？」

「え……ああ、そう。最近はずつとこれしか乗つてないなあ」相棒を労わるように、ヒューリーはそつと胴体を撫でた。

帝国最新鋭のノーティスクN2B 通称『ホーク』。その機体は、

軍服にも使われている、国色のゼニス・ブルーに染められ、単翼タイプの主翼と尾翼には、白と赤のラインが一本ずつ入っている。

メテオール軍では、通常、操縦士一人ずつに常に乗る機体を決める。愛機というものは存在しない。その時に応じて、状態の良い機体を優先的に戦場に出している。しかし、機体一つ一つにも継続的な調子や癖は存在する。そのため、可能な限りは同じ機体に乗り続けるのだ。

この機体に乗り続けてもう随分になる。もはや愛機と呼んでも差し支えはなかつた。

「ナディア軍より、ちょっとだけ速度は落ちるけど、その分風に乗れる。リセリア助けた時も、これじゃなかつたら敵機に追いつかれたかもな」

「そつかあ……」

眩しそうに青色の機体を見つめるリセリア。こつん、と機体に額をくつつけ、静かに瞼を下ろす。長い睫が、纖細な影を落とした。

「この翼で私のところまで来てくれたんだね。ありがとう」

水々しい桜色の唇が、慈母のように囁く。その横顔に、ヒューリイの心臓が不整脈を打つ。

「リセリア……」

「『めん』めんヒューリイ。説明に手間取っちゃってさ~」

その瞬間、空気の読めないのんきな声がヒューリイの意識を一気に現実に引き戻した。この、我が道を行くマイペースな口調は間違いなくフュリオットだつた。

「どうしたの、ヒューリイ。そんな恨みがましい視線向けて」「別に……」

歩いてくるフュリオットに、ぶつきらぼうに返す。別にリセリアに何かしようとしていたわけではないが、あの神々しささえ感じた少女の顔をもう少し見ていたかった気がする。

「そう? あ、その子が、ヒューリイが保護したって子?」

基地内の者には身元不明の少女を保護、としか伝えていないため、

ヒューアイやカルダが最初に抱いたリセリアに対する警戒心と「」いうものが、フェリオットにはなかった。

話の矛先を向けられ、リセリアが不思議そうな顔をする。

「はじめまして。僕はフェリオット・イーグルクロウ。ここで飛行機の整備をしています。よろしく」

「リセリアです。よろしくお願ひします」

名乗り返したりセリアに、フェリオットは右手を差し出そうとし手が汚れていることに気付き苦笑した。一瞬目を丸くしたリセリアも、彼の苦笑の意に気付き笑みを零す。

「早速なんだけど、機体はどう? 被弾はそんなに酷くないと思うんだけど」

その一言にフェリオットは、そうだ、と思い出したように呟いた。クリップボードに留められた紙を数枚捲り、フォーゲルの整備資料を取り出す。

「被弾自体は、大した事なかつたよ。右のフラップとエルロンが傷ついていたから、そこは取り替えたけどね。胴体に当たつた弾も数発だし、飛行に支障が出るような損傷もなかつたね」

「そつか。問題なさそうでよかつた」

機体に大きな損傷はなかつたこと。加えてフェリオットの至つて平静な表情に、ヒューアイは内心胸を撫で下ろした。飛行機に関しては知識も技術も人一倍抜きん出ているフェリオットなのだが、その分、手に掛けた機体への愛着も操縦士のヒューアイ以上に持ち合わせている。機体を傷つけて帰つてくる度に、雷雨が吹き荒れるのだ。それはもう、カルダ以上に。

フォーゲルはヒューアイ専用の機体に変わりはないのだが、フェリオットからしてみれば手塩に掛けた子供を預けているような感覚なのだろう。だが、
(被弾、自体は?)

妙に強調されていたフェリオットの言葉に、ヒューアイは気付く。その思考を呼んだかのように、汚れきった見た目には似合わない爽

やかな笑顔を見せるフェリオット。ヒューリイは反射的に回れ右をしようとしながら、それよりもフェリオットが詰問するほうが早かつた。「ヒューリイ。機体は大事に扱えって、前にも何回か言つたよね」

「大事に、扱つてます、よ?」

いつの間にか口調が敬語に変わる。

「その割には降着装置が随分痛んでたんだけどなー。石でも回転に巻き込んだのか、プロペラのブレードも欠けてたし」

「こ、心当たりがないなあ」

明後日の方角を見るヒューリイに、フェリオットは手元の資料をずっと突きつけてくる。見る、ということらしい。仕方無しに受け取ると、今フェリオットが言い連ねた事一つ一つが、こと細かに記載してあつた。技師としてのフェリオットの腕は確かなので、これらは紛れもない事実なのだろう。

言葉を失くすヒューリイ。言い逃れは出来そうになかった。

「無理な着陸とか、したでしょ」

「黙秘権行使します」

「したでしょ」

「……すみませんごめんなさいちょっとと無理しました!」

なおも三白眼気味の視線を強めてくるフェリオットに、ヒューリイはどうとう折れ、諸手を上げてリセリアを救出した時に無理な場所に停めた状況を説明した。

すると意外なことに、その話を聞いたフェリオットの反応は穏やかなものだった。

「まあ、その子を助けるためだったっていうなら、許してあげないこともないけど……リセリア?」

リセリアに視線を向けたフェリオットの眉間に、怪訝そうに皺が寄る。ヒューリイも振り向き、目を見張った。

口元に手を当てて、俯くりセリア。覗きこんだ顔は、傍目にも分かるほど血の気が引いて青白くなっていた。

「リセリア、どうした? 気分でも悪いのか?」

「ううん、大丈夫。ちょっとここの空気が苦しいだけ……」

「だけ、じゃないだろ」

「ここの、空気悪いからねえ」

倉庫内の空気は埃っぽい上に、その埃の粒子一つ一つに油や機械の臭いが染み付いている。苦手な人なら吐き気を催しかねない臭いだ。ヒューリーは既にこの空気には慣れているが、それでも時折、いつもこんな場所にいるフェリオットがよく体調を崩さないと思うほどだ。こういった場所が初めてのリセリアにとつて長居は辛かつたのかも知れない。

とりあえず、倉庫外で新鮮な空気を吸わせるべきだ。ヒューリーはリセリアの背をそつと押して歩き出す。

「悪い。あの整備、適当にやつといてくれ」

「ん？ ヒューリー、いつもあれこれ文句つけてくるのに、いいわけ？」

「今はリセリアの方が優先」

それにヒューリーがあれこれ言わざとも、フェリオットはヒューリーの飛び方や操縦の癖をよく知っている。それでもいつも意見が衝突するのは、ヒューリーの要求に対してもフェリオットがあれこれ試したいと好奇心を出すためだつた。だがフェリオットの調整した機体が、飛び辛いわけはないのだ。

「了解、少尉殿。と、ヒューリー。これ直つてるよ」

去り際のヒューリーに向かつて、フェリオットが何かを投げる。それを、半身を振り返つた状態でキヤッチ。それは軍のパイロットに一般的に支給されている「ゴーグル」だつた。入隊してから三年間、一度も大破せずに使つてゐる愛着ある品だ。四日前に怪我を負つた際に、ゴーグルを額の上に上げていたため右目のレンズに鱗が入つており、修理に回しておいて欲しいとフェリオットに頼んでいたのだ。ゴーグルを額の上に乗せる。定位置。やはりこれがあつたほうが落ち着く。「サンキュー」と小さく感謝の言葉を投げ返し、ヒューリーはリセリアを連れて倉庫入口へ向かつた。

「『J』めんなさい……」

田の端にうつすらと涙を浮かべて謝るリセリアの頭を、ぽんぽんと軽く叩く。その時、

「聞いた？ 理由もなく独断行動取った上に、『外』の女の子連れてきたんだって？」

どこからか、そんな軽薄な言葉が聞こえてきた。

ヒューリイは首は動かすことなく、目だけで声の方向を見る。少し遠い、若干機体の陰に隠れるような位置に、先ほどフェリオットに何かの説明を受けていた、数人の操縦士達がいた。よく見ると、別の隊の者だが何度も任務を共にしたことがある顔ぶれだった。皆揃つて、ヒューリイとリセリアに好奇の あるいは蔑むような視線を向けていた。

（まだいたのか。暇な奴らだな）

「ほら、あの子だろ」

ヒューリイに聞こえてないと思っているのか、それともわざと聞こえるように言っているのか、操縦士たちの声は内輪話にしては大きい。おそらく、後者だろうが。

よくある種類の話だった。ヒューリイは関係ない、と割り切つてそのまま外に出ようとする。だが、

「もう仕事復帰だろ？ あれで謹慎も刑罰も一切なしっていうんだる」

「さすが『空帝』。俺らとは扱いが違うよなあ」

その呼び名に、思わず足が止まりそうになった。だが、歩調を乱すことなく歩き続け、外に出る。その間にも、ヒューリイの背に投げかけられる言葉と、視線と、嘲笑。

「一般人こんなところに連れてきていいのかよ」

「でも身元不明だつて聞いたぜ？ 一般人じゃなくて、案外敵国の 人間だつたりするんじゃねえの？」

「ああ？ 『空帝』がいって言えば、なんでも許されるのかもよ？」

格納庫中に響く、笑い声。

今すぐ踵を返し、駆け出し、全員纏めて殴りたくなる衝動に駆られそうになる。ヒューリイは拳を強く握り締め、それを押さえ込んだ。そう。あんな奴ら、軍内にいくらでも蔓延っている。一々相手にしていたら、きりがないのだ。

「せいぜいお偉いさん方の期待を一身に背負つて飛んで貰えばいいや」

「ヒューリイ……？」

異変を察したりセリアが、不安そうな眼差しでヒューリイを見上げる。

さつと。噛み締めた奥歯が、小さく歯軋りを立てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0272ba/>

空色のリセリア

2011年12月31日18時03分発行